

「がんじがらめ」のなか得る自由

「お前、そのなままで三十年何しとったんや」そのくらいならきのう入門した子の方が器用にやりよるわ」ほか、あほー」といったことを皆の前で、師匠から毎日のように言われるのが、文楽の太夫という仕事です。二十歳で入門して三十年が経ちました。

「お前、そのなままで三十年何しとったんや」そのくらいならきのう入門した子の方が器用にやりよるわ」ほか、あほー」といったことを皆の前で、師匠から毎日のように言われるのが、文楽の太夫という仕事です。二十歳で入門して三十年が経ちました。



義太夫で聖書の物語織り紡ぐ

▲聖書の舞台、イスラエルを訪れた97年春撮影)ことをきっかけに、「イエスの十字架」など賛美義太夫の公演に新境地が開かれたという

早天の祈りあつての精進

70歳でないと出せない声がある世界

着けたサムライのような出で立ちで舞台上がり、口上に合わせて観客に頭を下げ、分厚い床本(ゆかほん)台本を天に向かつて祈りの姿勢でささげる。三味線の前奏とともに本を下ろして聞き、語り始めるのです。

◆実力の世界

現在、人間国宝の太夫は七十四歳で、その人が一時間もの長丁場を語られます。若い者はせいぜい十分くらいの演目しか語れません。声が続かないのです。年功序列ではなく、技術的に劣るので、肉体的、生理的鍛練の度合いが違つのです。

私たちは「滅私」の精神で修行を積み、精神的にも肉体的にもがんじがらめにされた状態で舞台上がります。そして「がんじがらめ」を基にして、大きな声量で、人物やストーリーを朗々と語り分けていかねばなりません。その時、えもいわれぬ演技のよさこび、放たれた自由のよろこびを獲得します。現実と虚居との虚実皮膜の

関係が重なり、一致する由々しき瞬間——。言わば、辛い修行とたゆまぬ努力という、責任と義務の延長線上に演技の自由が成立し、それを獲得する権利が生じるのです。

◆家拝の再開

我が家では最近、久しくとだえていた家庭礼拝を再開しました。十時前に家族四人がそろって十五分くらいの静かな時を持ちます。一日の疲れ、テレビの誘惑を克服して得るほんのひとときですが、そのなかに、ささやかながら、この世での天国のようなことがあふることに気がきました。

私の祈りは、自己中心であつたり、執り成しの祈りも見せかけになっている時があります。せつかく頂いた天国へのパスポート。ただ持っているだけではなく、その恵みを受けます、おのれ自身の聖別の糧とし、さらに世に向かってクリスチャンの見本として歩む。クリストの体なる教会を背負って立つ者たちの一人でありたいと切望します。

「世のクリスチャンよ、そのままがいい、そのままで……」と、「信仰義認」を巧妙にすりかえようとする、サタンのおそろさやきも聞こえます。いいえ！ イエス様にもっと期待し、聖霊にがんじがらめになつて、そして何ものにも変えがたい、「主にある自由」を勝ち得ていきたい。ヤコブのようになつて。

「…私の行いによって信仰を見せてあげよう」ヤコブ二